

250年の悠久の時を超えて受け継がれてきた八郎瀉町の願人踊。その一風変わった出で立ちの早いリズムの一直踊りは、多くの地域住民に支えられ、未来永劫途絶えるとのない保存・伝承の取組みが行われ、次世代に繋げていきます。

地域住民が支え受け継がれる伝統芸能「願人踊」（八郎瀉町）

250年の悠久の時を
超え伝えられた願人踊

この地域で、八重桜が満開となる毎年5月5日は、八郎

瀉町のひといち一日市神社（諏訪神社）

の祭典が執り行われ、県の無形民俗文化財となっている「願人踊」（がんにんおどり）が演じられます。

願人踊の願人とは、遠方にて伊勢参りが出来ない人に代わり伊勢へ参り、伊勢神宮で頂いたお札を各地に配って歩いたと言われている下級山伏・修験僧であったそうで、各地で覚えた歌や踊りを広めてまわりました。その中に伊勢音頭の流れを汲む願人踊が伝えられたと言われ、250年以上前にこの地域に伝わりました。

江戸中期、天明の頃（1783年）には伊勢神宮を参拝した郷土の先人により、伊勢音頭の手振りを従来の願人踊

に取り入れ、明治に入ると歌舞伎芝居の定九郎と与一兵衛の演ずる「仮名手本忠臣蔵五段目」のユーモラスな寸劇を組み入れるようになり、今日の願人踊が形成されていきました。

一風変わった出で立ちの
早いリズムの一直踊り

願人踊を踊るのは、一日市郷土芸術研究会（通称 願人踊保存会）のメンバー22名によって演じられ、踊りの構成は音頭上げ1人、踊り手4人、5人、歌い手3人、4人、それに寸劇を演ずる定九郎と与一兵衛の総勢12名ほどになります。

踊りは一風変わっていて、裾をはしよった女物の長襦袢（じゅばん）の羽織で前垂れを腰から下げ、紫色の頬かむりをし、鈴のついた手巾（てこ）と脚絆の出で立ちで、早いリズムで奔放に踊ります。



一日市神社の境内で家内安全・五穀豊穡を祈って奉納される「願人踊」

踊りの特徴は、手と足が同時に出て、盆踊りなどを思いおこしてもらえばわかるように、通常の踊りと全く逆で、「一直踊り」とも言われています。

メインステージは駅前 陶版壁画レリーフ

5月5日は子供の日でもあり、この日は「願人踊」のほか小学生らが演じる「子供願人踊」、子供たちが牽き山に乗って「秋田音頭」を踊る山車も繰り出します。

午前9時願人踊の二行は一日市神社に赴き家内安全、五穀豊穡を祈って、踊りを神前に奉納し、祭り気分一色の街へ出て行きます。このあと家々の前で神社に奉納した踊

りをお披露目して門付（かどづけ）を繰り返しながら回って歩きます。

午前10時JR八郎潟駅前では大勢の見物客が集まり、「願人踊」のメインステージの始まりです。同駅前には、町を象徴する千拓前の八郎潟の美しい夕日と願人踊りを中心に、一日市盆踊りと八郎潟を帆走する打瀬船をモチーフに加えた縦3m、横20mの「潟の詩」陶版壁画のレリーフがあります。ここで、一行は寸劇を交えた一通りの「願人踊」を披露するのです。

門付には花代と酒がつきもので、駅前での公演前に振舞われた酒でほろ酔いとなって演じる願人踊は、更にダイナミックになり、円熟味を増した大道芸となります。

このあと夕方近くまで門付をしながら一日市町内の各ステージで踊りを巡演して歩きます。「子供願人踊」、「秋田音頭」の牽き山車もそれぞれ町内を巡演して祭りを盛り上げて回ります。

保存・継承を託した 「子供願人踊」

この願人踊 戦後の混乱期



町内の各ステージで演じられる寸劇のひとコマ

には祭典統一などにより衰退の一途をたどり、演じられなくなりしました。その長い歴史が途絶えようとした昭和27年、「一日市郷土芸術研究会」が発足し、かつての隆盛を取り戻すためこの踊りの保存にのりだしました（これ以降毎年5月5日に開催）。

昭和40年代に入ると、青年会活動が盛んになり、青年会が地域づくりを積極的に行っていたころという気運が高まった時代で、研究会の中に青年会メンバーが居たことも相まって、願人踊保存、伝承に向けて町青年会が積極的にバックアップしていききました。

まず、最も重要である後継者の確保を図るため、町の小学生に踊りを伝えることに着目し、研究会の郷土芸能保存員が指導の中心となって町教

育委員会と連携して「子供願人踊」をスタートさせました。子供の頃にしっかりと基本を教え、踊りを経験させることにより、その中の何人かは町に定住して願人踊をやってくれるという信念のもと、願人踊を踊れる子供達を育ててきました。

以来30数年の歳月に、多くの願人踊経験者を輩出し、踊りを継承してくれる大勢の潜在能力を持った町民を輩出して来たのです。保存会・青年会・町民・町が一体となって保存・伝承に取り組んできたのです。

次世代に繋げていくこと が願人踊継承者の使命

願人踊の練習は子供願人人が中心で、5月5日が近づくと毎週土・日・月の午後7時から研究会の郷土芸能保存員の指導のもと1時間程度行います。したがって大人願人は、ほとんどがつつけ本番で、配役も当日に決められます。

研究会メンバーはこの道30年のベテラン選手が多いこともそれを可能にしています。

子供・大人願人踊とも、祭で演ずるほかに、福祉関係施設や町の行事イベント等でも演じています。ほとんどがボランティアで、特にお年寄り達から喜ばれると、踊りをやっていて本当に良かったと思うそうです。

研究会メンバーも高齢化を迎えており、潜在能力がある若い世代を積極的に掘り起こし勧誘して、次世代に繋げていくことが今後の課題となっています。ベテランと若手が程よい形で構成され、これまでの保存・伝承活動を継続していくことが、願人踊継承者の使命であります。

町でも、町民がこの伝統芸能を大切に、継承していきという意識を更に高めていきたいとしています。来る5月5日の「一日市願人踊」に注目したいところです。

